
新ヨーロッパ大戦

虹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新ヨーロッパ大戦

【Nコード】

N6011L

【作者名】

虹

【あらすじ】

テロで死んだ主人公が1899年のドイツに転生して、歴史を変えていく話です。

第1話（前書き）

今回はじめて小説をかきます虹です。
拙い文ではありますが、よろしくお願ひします。

第1話

20XX年 日本

レポーター「……政府発表によると、現在まで被害者の数は一千人近く……」

日本史上最悪の地下鉄同時多発テロによって多くの市民が犠牲となった。

この物語は、そのテロによって犠牲となった男の話である。

「……くっ!」

「あんた大丈夫かい？」

「ああ」

「ちっ! 頭を打ったか しかし、ここは……? 街並みもかなり違うな。」

「すみません ここは……」

「おいおい ここを知らない?」

・・・

「・・・ふうくん ここはドイツ帝国の首都ベルリンだぞ！ で、何処に行くんだ。坊主？」

「ありがとうございます 今思い出しましたので大丈夫です」

「そうか」

とってその男は去って行った。しかし、今ベルリンにいることが分かった。だが、ベルリンの何処にいるかまでは分からなかった。

そして、店の前にあるショーケースのガラス越しに映る顔を覗き込んで啞然となった。

何と鼻は高く、目はエメラルドグリーンをしていて、そしてなんと肌の色が真っ白なのである！

・・・まさか・・・！！

すぐ近くにいた背の高い女性に声をかけてみた。

「あ〜」

「はー」

「今日は何日でしょう？」

「1899年12月10日ですけど・・・何か？」

「どっどっもありがとう！」

「はあ？」

とりあえず20世紀のドイツにいるということまでは分かった。そして、考え事をしていると急に男性に声をかけられた。

「こんなところにいたのか！！ さっさと家に帰るぞ！！！」

「はっ・・・はあ??？」

「何寝ぼけた声を出してる？ まったく・・・ さあ！」

そして、男に手を握られ家まで連れてこられた。

かなり大きな家だなー

そんなことを思っていると男が一人出てくるのが見えた。

「何を突っ立っている！！！」

「父さん連れて帰りました」

「まったく 何処まで買い物に行っていたんだ」

・・・

「まあいい 部屋に戻りなさい」

「さて 現状は何とか掴めてきた」

とりあえず近くにあった紙に自分の現状を書き込んだ。

西暦1899年 場所ドイツ・ベルリン そして家族は先ほど兄（？）確認したところ父・母・兄・オレの4人家族だそうだ。そして、自分の机を漁っていると”アルバート”と書かれた手紙が見つかった。

「問題はこれからだな まず、^{カイザー}皇帝に会えればいいがこの時代じゃ無理か」

などと考えている間に夜が来てしまった。

「夕飯の時間だぞ」

下の階から「ご飯ですよ」の合図が来ました。

まあ、この世界（？）に来てから初めてのご飯になるがかなり質素なものとなっている。

「さて、今日は一日なにをしていた」

とありきたりな会話をしてる。

「父さん 後で話があるんだけど・・・」

「どづした・・・」

「・・・」

「ふむ 後でお前の部屋に行くよ」

「わかった」

第1話（後書き）

感想お待ちしています。

第2話（前書き）

一応更新は1週ペースで行きたいと思います。

第2話

コン コン

「どうぞ」

「さて何の話をするんだ」

「実は…」

と私は、父親らしき人に今の自分は違う人間であること、そしてこれからのドイツ史について大まかに話した。

「まさか…皇帝陛下にそんなことが」

「それが、私の知っている限りの歴史です」

「しかし、それを教えたからといってどうなる」

「私は出来ればこのままドイツの歴史を歩んではいけない」

「ならば、どうすれば」

「まず、この世界の正確な情報が必要だ」

と必要な事項を父に話した。

- 1：各国の歴史について史実と同じような歩み方をしているか。
- 2：皇帝陛下に謁見する必要があること

3：特に科学力について各国からリードをつけること
.....

など様々なことがあげられた。

「うむ…」

「まず、皇帝陛下に謁見することはすぐには無理かも…」

「そんな、悠長な時間は残されていない」

「あと、15年以内にこの国は世界戦争を多くの国民と多額の賠償金を支払うことになるんだ」

「……」

「わかった 何とかして掛け合ってみる」

「しかし、お父さんはだれか知り合いの方がいらっしゃるのですか」

「なあくに、無駄に年齢としは送ってないぞ」

「はあ……」

「しかし、お前も昔の名前だといろいろと不便になると思う」

「そこで、名前を変えろというのはどうだ」

ニヤニヤ父が笑っている。

「そうですね できれば名付けていただきたいのですが」

「うむ それをまっていた」

「よし、お前の名前は…」

「アルブレヒト・メルツ・フォン・クイルンハイムでどうだ」

「ほう そろきますか」

「まあ なにかとそっちのほうがよからう」

「さて、明日からは長い一日になる さっさと寝ることにしてよ」

「そうですね そいえば、デスクの中に”アルバート”からの手紙があったのですが」

「ああ それはアルベルトとのことだな」

「… まさか アルベルト・アインシュタイン」

「そのとうりだが まさか彼は何かしたのかね」

「まあそんな感じですね」

「そうか なら、彼の家は近いから明日にでも尋ねたらどうだ」

「そうなんですか」

「ああ そうだ、一応地図を書いておこう」

.....

といるいと父と話していると深夜になっていた。どうやら父は昔の伝手をたどって皇帝陛下に会えるか聞いてみてくれるらしい。

まあ、会えなきゃ終りなのだが.....

という事で明日はアインシュタインに会うこととなった。

第2話（後書き）

感想お待ちしております。

第3話（前書き）

なぜか文章がうかんでくる〜〜（笑）

第3話

次の日

「ここか」

意外と彼の家はちかった。

コン コン

「どなた」

「すみません アルベルト今いますか」

「えっと 今ちょうど…」

「あっ 少しまって」

すこしまっているドアが開いて女性が部屋に案内してくれた。

「こちらです」

「ありがとう」

そして、アルベルトは椅子に座って本を読んでいた。

「…やあ」

「…」

反応がない。

「アルベルト久しぶり」

「…」

やはり、反応がない。夢中で読書をしている。そこで、話を變えてみた。

実は…

と自分が未来からやってきたことについて話してみた。

すると、アルベルトはこっちを向いて驚いた顔をしていた。

「本当かい？ それなら、未来の僕はどうなっていた。」

とまじまじと見てきた。そして、こう伝えた。

「君はこれから、20世紀でもっと偉大な物理学者となる。しかし、その一方で君は罪の意識にさいなまれる。」

「罪… 一体僕は何をしたって言うんだい」

「君はパンドラの箱を開けてしまった。」

「…パンドラの箱…」

「そう パンドラの箱」

「なるほど」

と彼はまた何かを考えるように本を読み始めてしまった。

「アルベルト今日はある重大な話がある それは、これから世界の歴史を変えることになる」

…

彼は沈黙している

「実はこれからこの国は2度の世界大戦をして多くの人が死ぬ しかも、この死者の中に君が殺す人もいる」

「なぜ 僕は兵隊になるのが嫌でドイツ国籍を破棄したんだ」

「いや 兵隊としてではなく…」

「何だっというんだ」

「分かってくれ 君をそうさせないため そして、この国をより一層よくしていくために力を貸してくれ」

「僕が君に力を貸したからどうなる」

「今父が皇帝陛下に謁見出来るかを聞いてくれている」

…!!

「そこで君は一体何をするだい」

「まずこの国の歴史と世界史について話す　そして、これからどうしていくべきかについても」

「そうか　分かった　それで、僕のポジションはどうなるんだ」

「ありがとう　アルベルト」

「これから、君には国立研究所で研究してもらいたい」

「わかった　そうすればハンドラの箱は開かないのかい」

ああ。と私がつなずくとアルベルトは安堵した表情になった。

そんな時、先ほどの女性が部屋に駆け込んできた。

「アルブレツヒさん　ちょっといいですか」

「一体どうしたんです」

「お父様がすぐにとお呼びです　あと、アルベルトも一緒にと」

二人ともわけがわからず、アルブレツヒの家に向かった。

すると、家の前には馬車が止まっていた。そして、馬車から人が降りてきた。

「父さん」

「おじさん」

「さあ、二人とも馬車に乗るんだ」

「一体どうしたの」

「いや、今日謁見出来るか聞いたらすぐに連れてこいとのことだ
つたんだよ」

…！…！

「さあ、いくぞ」

第3話（後書き）

感想お待ちしています。

第4話（前書き）

就活で更新ペース遅れたことお詫びします。とりあえずめどがついて気なので頑張っ更新していききたいと思います。

第4話

「さて。ついたぞ」

「ここが…」

そこは、自分が想像していたより豪華ではない宮殿だった。

父が警備と話してきて、宮殿内に案内された。

「しかし、今日とはあまりにも早すぎじゃないかな」

「うむ。ちょうど今日は皇帝陛下もあいている時間があったのだよ」

と話をしているうちに大きな扉の前までついた。

「ここで待っておれ。」

と衛兵に案内されて部屋に案内された。そして、数分がたった。

バン

と扉が大きな音を立てて開いたのと同時に男性が数人と皇帝陛下が入ってきた。

「私がこの帝国の皇帝である。ヴィルムヘルムである」

とまあそのあとも各々の自己紹介があった。

「さて、今日は何のようでごここに来た。」と側近である男が話を切り出した。

「実は話を始める前に皇帝陛下と二人きりで話したいのですが…」

「…はあ。何を言っているのだ。そんなこと…」

と言おうとした時に、わかったと皇帝陛下が…ってそんなんでいいのかよと心の中で思っているうちに部屋には皇帝陛下と私とアルベルトと父だけになっていた。

「まず、本日ここに…」

「堅苦しい挨拶はよい。単刀直入に聞くがお前は何者だ」

うわあ…めっちゃ不審者に見られてるわ

「はあ…出来るだけ内密にお願いしますね。実は…」

と自分のこれまでの経歴やここに至ったまでの話とこの帝国についての話をした。その話を横にいるアルベルトがまじまじと聞いていた。

「…とこのドイツ帝国は世界大戦に敗北し天文学的な賠償金を負わされることとなりす」

さすが話についてこれたのは父ぐらいで後は啞然としていた。

「その話が、あと15年ごに起こると」

「ええ。間違いなく起こります。そして、多くの国民が死ぬこととなります。」

「うむむ」

「そこで、私としてはこの歴史を変えたいと思つのですが」

「そこだ。なぜお前はこの国の歴史を変えようと思つたのだ。」

まあ、普通に考えればそう思うだろう。しかし、ドイツ国民として生きてる今はこう答えるのが当り前だろう。

「私は、ただこの国を救える知識があるのにそれを座って見ているようなことはできません。しかし、その力は今の私にはまったくない。でも、それでもこの国を少しでも救うことができるなら」と

「うむ。そこまで考えているのであるなら余が力を与えてやろう。」

「しかし、陛下少しの力では大きな力には勝つことはできません。」

「確かに。では一体どのようにすれば」

「後30年あれば適当な役職について動けばいいのではありませんで、15年を切ろうとしています。なので、相当な権力必須事項となつてきます。」

「つまり、ビスマルクと同じ役職ということが早いということが。」

「まあ、そうなりますね。」

「そうか。わかった。」

「この帝国を救うにはお前の知識が必要になる。今を持ってお前を宰相に命ずる。」

「ありがたきお言葉。」

と話はこんな感じで終わったことで、私はある提案を出した。というより最優先事項だったので書類は後回しで作る予定の件について話した。

「実は、軍備拡張政策をとっているのですがこれを取りやめていたのですが」

「それは、出来ぬ話だ。」

「しかし、やめないと戦争になりますよ。」

「では、一体どうしろというのだ」

「まず、軍備については書類にて提出します。予定では1910年を目安に陸軍・海軍の増強を行っていききたいと思います。それまでは、イギリスやアメリカとの協調外交策で行くしかありません」

「それでは、それまでの10年で一体何を増強するのだ。」

「それは、富国強兵の富国を先に実現させます。」

「具体的には、ドイツ高等研究所を作ります。そこにおいて、各分野について研究していきます。そして、私がこれからいくつか

の企業をこと国に誘致したいと考えています。」

「まず、具体的に企業はフォードが優先的に誘致します。そして、人員については、そのつど報告していきたいと思います。」

「わかった。フォードに関しては速やかに手配しておこう。しかし、今日はいろいろと有意義な話ってきた。私はこの後予定があるので席をはずす。宰相の件については、明日正式な人事を通達するがこの人事は極秘とする。この後は、どうするかな？」

「そうですね。とりあえず研究所の件では細部をにつめて2週間以内には報告したいと思います。」

「わかった。それでは。」

第4話（後書き）

感想お待ちしています。

第5話（前書き）

遅れました。取り合えず就活終わりました。

第5話

翌朝

新聞を読んでいると昨日皇帝陛下とのことについて一切取り上げられてはいなかった。

そこで、父に聞いてみようと思ったが今日は家にいる気配が感じられなかった。とりあえず今日は、昨日寝るときにひらめいた軍資金調達をするために会社を興すことについて考えてみた。

会社内容としては、Tシャツを販売する予定である。まあ、とりあえず大量生産によるコストダウンと女性の雇用を創出することによつての売上（軍資金）を上げていきたいと考えた結果だ。また、大量生産はフォード氏を招いて直接指導をもらうことを考えている。

この話はここまでとして「ドイツ高等研究所」(deutsches hohes Forschungsinstitut)略してDHFとして今後活動を行う予定である。

研究内容としては、航空・化学・機械・電気において主に力を入れて研究を行っていく。

- ・ 航空は主に次世代飛行機やロケットについての基礎技術
- ・ 化学では今後やってくるスペイン風邪についての研究

・ 機械はまずディーゼルエンジンと航空エンジンの開発とコストダウン

・電気では主に半導体や発電効率の改善

についてに研究をして行く予定だ。

なんてことを考えると名前を呼ばれていることに気がついた。

「アルブレツヒ！」

「…何？」

「何じゃない。さあ、今日も宮殿に行くぞ」

「えっ、今日も??」

「ああ。今日は昨日お前が話していたDHFについての人員や予算、研究所をどこに作りにいくかを考えに行くんだぞ」

「そうか。わかった」

とすぐに支度をして、宮殿に向かうのであった。

いざ、宮殿につくと昨日と同じく警備に話をつけて入ることになった。そして、またあの部屋に入って待たされることとなった。しばらく待つと皇帝陛下が来た。とりえず、挨拶をすまずと話が始まった。

「さて、昨日の件についてだが…」

とここでの会話は長くなるのであえて省かせてもらおう。とりあえず、今回決まったことはやはり大英帝国イギリスに追いつくための海軍拡張計画を削減もしくは凍結することとなった。次に昨日自分が提案したDHFを設立することは勅命によりすんなりと成立した。そしてドイツ本国にフォード氏を招くことについては何とか了解を取らすことに成功した。

「うむ…」

「一体どうされたのですか。」

「いや、軍縮を初めて国民が納得してくれるのかと…。」

「そこなんですが…」

今後の流れを説明した。予定としては、まず浮いた予算で国内産業の発展および高速鉄道と高速道路の建設を行い国内産業の強化を行う。これを第一次国土開発計画とする。

これと並行して、車や機械に使われるネジや治具ぐいの規格統一を行うこと。

そして、軍は浮いた予算で近代化を進めていくこと。具体的には以下のようになった。

・陸軍は機械化を進めて生き1920年代には半数の師団が機械化されていること。

・陸軍は対戦車及び対空の脅威に対して前者は1910年代、後者は1930年代までに対応できることとする。

・海軍は今後自国を防衛出来るだけの最低限の兵力とする。ここで自国とは植民地にも適用される。

・新たに空軍の創設を行うこととする。

・空軍は戦術空軍と戦略空軍を持つことにする。

・空軍戦力は1910年代までにはある程度確保する。よって、優先的に戦術空軍を整備することとする。

と決まったところでいったん休憩となった。

・

第5話（後書き）

感想お待ちしています。

第6話(前書き)

とりあえず更新できました。

第6話

さて、休憩が終り午後の会議が始まった。

次は外交となった。ここで決定した事項としては以下のものとなった。

・1940年代までは大規模な戦争（いわゆる世界大戦）を行っては行かない。

・それ以前は次の国々と同盟もしくは友好関係を結ぶこととする。
大英帝国・アメリカ合衆国・ロシア・清・大日本帝国とする。

・現在獲得している領土はコストと見合えば保持していく。しかし合わないようであれば売却していくこととする。

・よって、以下の領土は大英帝国と領土交換を行うこととする。
ビスマルク諸島及びソロモン諸島・ラバウル近海・青島周辺

・しかし、バルカン半島の不安定化が懸念されるため軍の派遣することは戦争とはみなさない。

と以上のものが基本外交方針として打ち出された。さらに、省庁を増やすことを決定した。以下のものとなった。

・兵器局・・・DHFは主に官民主体で軍事利用可能なものと民間で利用可能なものを同時に開発する。しかし、ここでは軍の主要兵器を開発することとする。

・情報局・・・ドイツの諜報機関

一応このようなものを作っけてい行くとゆうことに決定した。

「何とか形が見えてきたか。」

「うむ。しかし、まだまだ始まったばかりだ各々気を引き締めて行っけていくように。」

と会議参加者が一斉に立ち上がった。そして、各自解散していくこととなった。

「さて、今日は終わったし帰ろうか・・・」

「アルブレヒトはこの後まだ話があるから残るように」

「!!!」学校かよと思いなから声には出さず待つこと10分陸下の秘書が部屋に迎えにきて個室に案内された。

そうやら、その部屋は客ももてなすにはあまりにも質素な造りであつた。

「さて今日の本台はここからだが・・・」と陛下が話始めた。

どうやら、海軍拡張計画の凍結にかなり不満がたまっているらしい。まっ、ここで納得してもらわないと困るのでとことん話すこととした。

「つまり、今後戦艦は不要になっけていくと」

「そうです。今後は飛行機が発展していきます。それに伴って様々な兵器が開発されていきます。そして、戦艦は取り残されていく運命にあります。」

「うむ。では飛行機とやらを今後開発していくということが重要と
いうことになるのでしょうか」

「そうです。これからは制空権を制したものが世界の覇者になると
いつでも過言ではありません。」

それから陛下は黙りこんでしまった。そこで、僕からある提案を
行った。

「私は未来の知識が多少なりともあります。そこで、提案なんです
が各国の優秀な人材特にこれから活躍するものをドイツに住まわせ
るというのはどうでしょう」

「それは、またすごい計画だ。しかし、成功はするのか」

「そうですね。まだ、青年や子供がかなり多いと思うので家族ごと
呼びましよう。ある程度の優遇すれば来るとおもいますし。」

「そうか。」

「しかし、この計画はなるべく秘匿に行いたいと思っています。
そこで、私の直轄の機関を立ち上げて行動していきたいのですが。」

「そうだな。それが情報の漏洩は少ないと思う。しかし、報告は直
接私に提出するように」

と今日の話は一応ここまでとなった。

第6話（後書き）

感想お待ちしています。

第7話

D H Fについて

まず、D H Fだが場所としてはニュンベルク近郊に作ることにした。また、兵器局についてはD H Fの近くに建設する予定である。そして、建物としては地下3階から地上5階の建物となる。とりあえず敷地はかなり広い面積を占めることは間違いない。さらに、軍縮を行った予算で最新鋭の装置と人員を配置することとなっている。

そして、各研究分野の研究者をここに集めて集中して研究してもらったこととした。もちろんその中にはアルバートもいる。さて、各研究の人員でも紹介することとしよう。

・航空科（ここではロケットについても研究する）では、アメリカからロバート・ゴダード、ロシアからコンスタンチン・E・ツィオルコフスキーをドイツに永住する代わりに十分な研究費を渡すことを条件に家族ともども来ていただいた。さらにアメリカからライト兄弟も同じ条件でよんできた。

・化学には、フランスからマリ・キュリー、アメリカからギルバート・ルイスも同じくドイツ国内に連れてきた。

・機械では、ルドルフ・ディーゼルが中心となって若手たちと実践しながら研究を行っていく。また、ノルウェーよりエギディアス・エリングをヘッドハンティングしてきた。彼によってドイツのジェットエンジンの技術は格段に上がることとなる。

・電気ではジョージ・ウエスティングハウス／ニコラ・テスラを

ドイツ国内に連れてきた。

と人材としてはかなり上出来である。また、国内の工学系大学から優秀な生徒を何人か研究生として一緒に研究してもらったこととした。

さて、ここまで決定しておけば何とか技術面ではヨーロッパでは負けない感じにはなった。しかし、ソ連になる前に優秀な軍人と研究者をドイツ国内に連れてくる必要がある。そのため、別の作戦で行うこととする。

この話はまた今度。

「さあ、これで一息つけるか」

と思いきやまたまた馬車がお迎えに来ました。

「また、このパターンですか。」

と思いきや馬車は宮殿とは違いすぐに警察本部に案内された。

「まさか…何かしたっけ？」

とばかりなことを考えていると大きな会議室に案内された。そして、所長のような人と白衣を着た人が数名入ってきた。すると、席に案内された。

「実は、アルブレヒツヒさん皇帝陛下から直接警護のほうを命令されたのですが特に目立った人材がいないので困っています。」

そんなに、いないのかよと思いつ何かアイディアがないか考えて

みた。

「では…」

と要約した内容です。まず、退役した軍人もしくは現役兵で優秀な兵士を数十名ピックアップする。そして、これを警察の特殊部隊として配属させる。史実ではGS9にあたるような組織である。これの中からさらに優秀な兵士を自分の護衛とする。ということ提案するとすぐに所長は納得した表情になった。

「それは、素晴らしい。その部隊名はこちらでいくつか案を出すので陛下に決めていただきます。あとなんですが…」

なにか気まずそうな感じになっていると後ろから何人かが何かを搬入してきた。

「実は昨日ミュンヘン近郊で発見されたのですがあまり見慣れたことがないものが発見されました。もし、出来れば一見だけしていただきたいのですが…」

とパソコンが数台と専門書が数百冊搬入が目の前に用意されていた。

「…これは!! 発見者は今どこに!？」

と身を乗り出して聞いてしまった。

「発見者は女性で今は自宅にいるようですが…なにか?」

「すぐにこの場に連れてきてください。それと、この件については

「一切他言無用でお願いします。」

「了解しました!! すぐに発見者は連れてまいります!!……!!」

と慌てて部屋を飛び出していった。

「さて他のみなさんも今日ここであったことは記憶から消してくださいね。」

「とりあえず、家に戻るか。この資料は僕と一緒に家まですべて運んでください。」

「かしこまりました。」

と部屋を出て帰宅しました。明日からは大変になると思う。

第7話（後書き）

感想お待ちしています。

第8話

あれから1年がたった。

この1年はいろいろなことがあった。とりあえず、DHFの建物が建て始められ今のところ70%ほど出来たところだろうか。これも、軍備を削ったおかげである。しかも、イギリスの信用回復にもつがった。しかし、海軍はどうやら納得がいけないからクーデター騒ぎもちらほら聞こえたが皇帝の一言で一応収拾は取れてきた。

また、フォードを招いた結果大幅に企業の業績が上がったりもした。ちなみに各国からピックアップした研究者たちは施設が出来るまで国内の研究所で研究してもらっている。さらに、規格統一されたことにより丈夫で安心して使えるドイツ製品の売れ行きが良くなることは今後楽しみだ。

さて、軍は予算が減らせさせてしまったが人員整理や機械化を進めた結果かなりスマートな軍の形が見えてきた。特にフォードがドイツ国内に工場を持ってきた結果ダイムラー・モトーレン・ゲゼルシヤフト社などの自動車会社が大きく業績を争う中で成長していくということも非常に楽しみである。

しかし、ここまで来るまでにやはり貴族達の抵抗があった。そこで、抵抗勢力だが皇帝の勅令により抑え込むか法律である程度抑え込むことが出来つつある。しかし、あまり締め上げるのは良くないの少しずつ影響力を弱めていくことにする。

そして、俺が興した会社なんだがどうやらかなり業績がいらしい。というのも、もともとTシャツはあまり販売されていなかった

ということが大きかったのだろう。特にこの夏は業績を伸ばしていきたい。ちなみに、自分が社長だが経営については優秀なユダヤ系の人に任せてはいる。監視役として、第三者機関をそうせつもした。

それと、前に発見されたパソコンや専門書を読んだ結果、パソコンにはロケットのシミュレーションソフトやCAD、基礎的な軍艦や戦車・飛行機の設計図（主にエセックス型空母や大和型戦艦・H型戦艦に伊400型潜水艦。戦車では、パンサーやT-34現代のM1A1やレオパルド。戦闘機ではFW・190やB29）があった。しかし、この時代ではあまりにも斬新すぎるので受け入れられないと思う。そこで、直属の機関を設立してあったのでその中で特に優秀な数名をパソコンや専門書で勉強させることとした。

「ふう、なんかあつという間に時間がたってしまったな。」

「そうですね。あつ、この後は各大臣たちとの打ち合わせとなります。」

あつ、この人は例のパソコン発見者です。なんか、とある貴族のメイドをしていたそうですが情報漏洩の原因になるといけないので今は自分の秘書官をやってもらっています。どうやら、彼女は文書管理能力やスケジューリング調整能力がすごい高いようで今ではなくではならない人です。（笑）

「それじゃあ、行くとしますか。」

そして、会議室につくといつものメンバーたちが座って待っていました。

「さて、今回の議題は……」

そして、来年にオーストリア＝ハンガリー帝国に侵攻することを提案した。

表向き理由としてはドイツ人の保護として本音は地中海の航路と労働資源の確保を呼び優秀な人材・企業の獲得にある。しかし、侵略者として迎えられるのは嫌なので情報局による工作によって民衆はこちら側に引き入れておきそして、暴動が起きた時一気に攻め込んでいく。とまあありきたりのパターンではある。

「しかし、それでイギリスやフランスは黙っているでしょうか。」

「確かに。そこで、早めにイギリスと交渉に入る必要がある。ここで、太平洋の領土をある程度イギリスに格安で売りつければ何とかなるだろう。」

「しかし、それでは我が国の利益が…」

「遠いところにあつてもしょうがない土地はいらない。むしろ、オーストリアのほうがよくばど利益になるのではないか。」

と各大臣は利益について計算し始めた。そして、各大臣はそれに同意した。

ここで、陛下に案件を持っていき裁可をしていただき正式にオーストリア＝ハンガリー帝国侵攻作戦が軍に立案された。

作戦発起は1902年1月20日となった。

第8話（後書き）

感想お待ちしています。

第9話（前書き）

更新遅れてすみません・・・

第9話

現在時刻 18:30

「やっと家か…。」

あれから、だいぶ会議が長引き今に至る。

「はあ。今日の夕飯はなんだろ。」

と今は実家から出て一軒家をベルリンに住んでいる。現在は一人暮らしでメイドさんがいるので身の回りの世話は任せている。

「明日は、軍の視察に行くか。しかも、極秘で訪問とは何ともな。」

「そうですね。むしろ大々的にアピールしていききたいですね。」

「うん。そういえばこの後の予定は？」

「今日は一日中会議でしたので午後の予定はほとんど入れておりません。」

「そっか。じゃあご飯でも食べるか。」

「はい。」

その後、秘書と一緒にご飯を食べて適当に書類の整理を進めた。そして、あっという間に時間が過ぎ気づくとだいぶ遅い時間になっていた。

「さて、明日の予定はなんだっけ？」

「明日は陸軍の訓練視察と新兵器開発に関する報告会があります。」

「出来れば、帰りにベルリンによりたいんだけど……」

「そうですね。時間的には少し難しと思いますが……」

「そっか、仕方ない別の日にするよ。今日はもう遅いから先に休んでいいよ。」

「ですが……。アルブレヒト様はまだお休みになられないのですか。」

「ああ。ちょっと調べ物があるんで。」

「そうですね。それでは、先に休ませていただきます。おやすみなさい。」

「おやすみ」

彼女はこの家の隣の部屋に住んでもらっている。そっちの方がこちらとして何かと都合がいいのだ。

「さて、こないだ見つけたファイルを開くか。」

こないだ発見されたPCの中のファイルを整理していると他の設計図や法律・世界地図とその大まかな歴史・油田やウラン鉱山などの採掘資源が書かれた地図も一緒に入っていた。そこで、今後の戦略が練直された。

今後は、オーストリア・ハンガリー帝国を解体して、現代のオーストリアとチェコの領土を併合する。そして、併合すると同時にイギリスに対して、南洋諸島、ニューギニア北東部およびビスマルク諸島、サモアを領土交換に使うこととした。

そして、オーストリア・ハンガリー帝国はハプスブルク家が大きな勢力があるのでこれがある程度解体するのが今回の目的である。簡単にいえば資金調達にもなる。

占領したいイギリスと領土の会議を開くこときめた。

「しかし、フランス・ロシアがどう動くかだよな。」

まあ、イギリスをこちら側に引き込んでいく必要があるな。それと、短期間で終わらす必要があるな。そして、昔の戦争のやり方はここで終わらせたいほうがいいな。ということを確認しつつ寝ることとした。

第9話（後書き）

感想お待ちしています。

第10話(前書き)

ついにPV10、000超えました。

更新遅れてすみません。

第10話

とある口。

今、陸軍の訓練で特に自動車を戦闘で使えるかを判断するというものであった。また、この訓練では各企業から軍事部門関係者さらに、研究者たちも同伴して改善点を開発側・生産側・運用側で様々な観点から検討するために行っている。そして、これからも定期的に行っていく予定である。

「さすがに、まだ使える自動車はないか…」

「そうですね。しかし、兵士達を前線まで送ることや補給を改善するには役立ちますね。」

史実、第二次世界大戦ではアメリカでは補給に関しては世界でトップクラスの補給力があつた。それを凌駕するための、力を確保するために1930年代には力をつけていきたい。

「しかし、この車に野砲を付けたら面白そうではないか。それにある程度の装甲も付けると戦争に革命がおこると思うぞ。」

「そうですね。とても、ユニークですぐにでもできそうです。」

「うむ。すぐに実施してくれたまえ。」

「ええ、別の口。」

「試作機の試験飛行か…」

「そうですね。無事に飛んでくれるのでしょうか…」

さて、現在とても広い所に護衛部隊と試作された飛行機と科学者とパイロットが数名います。飛行機の前では「あーでもない・こーでもない」と聞こえてきます。

「そろそろ、時間ですね。」時計を見る秘書が言ったと同時にエンジンが始動した。

機体はグングンスピードを上げてやがて離陸予定の距離に達した。その瞬間機体は地上から舞い上がった。

「ふう、成功したか。」

「そうですね。後は試験項目とつりに進めていくだけです。」

「しかし、3年も早く飛んでいしまつとは…」

そう今飛んでいる飛行機はなんとライト兄弟たちとドイツの力を合わせて作ったものである。速度はライトフライヤー号と変わらない48Km/hであった。

「とりあえず、帰って残りの仕事をするか。」

「かしこまりました。明日の予定は…」

ここからは、スピードを上げて話を進めていきたいと思えます

「ついにこの日か。」

「全軍に伝える。ただちにオーストリア⇨ハンガリー帝国国境を越えて首都を占領せよ。」

「はっ。」

「予定では1か月で占領するだったよな。」

「はっ。侵攻ルートは、国境沿いの鉄道を用いて一気に侵攻していきます。」

「うむ。では、逐次連絡をよこしてもらいたい。」

「はっ。」

さていよいよオーストリア⇨ハンガリー帝国侵攻作戦が始まるうとしていた。

第10話（後書き）

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n60111/>

新ヨーロッパ大戦

2010年12月8日21時22分発行